言論統制時代の反骨・抵抗の言論人――
桐生悠々の反戦雑誌、待望の復刻

他山の石

一九三四（昭和九）年六月～一九四一（昭和一六）年九月

全四巻〈総一七三冊・「廃刊の辞」〉＋別冊一

桐生悠々（一八七三―一九四一年）主宰

以下の文章は、悠々が『他山の石』誌上に掲載した文章から一部分を抜粋したものである。

新聞記者生活三十余年、しかも到るところに孤軍奮闘の大悪戦を続け、今漸く囲を潰えて帰り来り……蟋蟀（こおろぎ）は鳴き続けたり嵐の夜

第二年第三号（一九三五年二月）「編輯後記」より。批評欄「緩急車」を設けるにあたって。

私たちの戦慄に堪えないのは、第二の世界戦争は、第一のよりも、著しく残酷であり、非人道的であつて、非戦闘員を引きくるめての、そして文字通りの各国々民を挙げての絶望的戦争であるだらう……

第二年第一〇号（一九三五年五月）「緩急車」欄「第二の世界戦争」より。第二次世界大戦の予言となっている。

だから、言つたではないか、疾くに軍部の盲動を誡めなければその害の及ぶところ実に測り知るべからざるものがあると。

だから、私たち平生軍部と政府とに苦言を呈して、幾たびとなく発禁の厄に遇つたではないか。

第三年第五号（一九三六年三月）「緩急車」欄「皇軍を私兵化して国民の同情を失つた軍部」より。二・二六事件に対する軍部への批判。

この原稿が活字に拾はれ組まれた後、愛知県警察部長より、日支戦争に関しては一切論及することを許さず、唯政府のなすところを傍観せよといふが如き趣旨の達示があつたので、ここに遺憾ながらこの全文を抹消する。

第四年第一三号（一九三七年七月）掲載の「日支再戦せば」の文中、ほとんどが白紙にされていることへの断わり書き。

とするならば、日支事変は永久に解決されないかも知れない。たとひ解決されても、前途遼遠日暮れて道遠きの感がないでもない。手取早き方法は、兎にも角にも、表面上支那の主権者たる蔣介石と和を講ずることである……

第六年第四号（一九三九年二月）「緩急車」欄「始あつて終なき日支事変」より。「手取早き…」以下は検閲によって削除されていた部分を原稿によって書き起こしたもの。

清算期が来たのだ。すつかり過去を清算して出直してほしい。これが為ならば私たちはどんな犠牲を払つてもよい気がする。

第六年第七号（一九三九年四月）「雑音騒音」欄より。日中戦争の長期化に対しての所見。

戦争第三年の春を迎ふるに際して、……支那赤軍の指導者毛沢東が、曾て日本に対する自由戦争に於て、支那が最終の勝利者であるだらうと言つた揚言を想起せずにはゐられない。

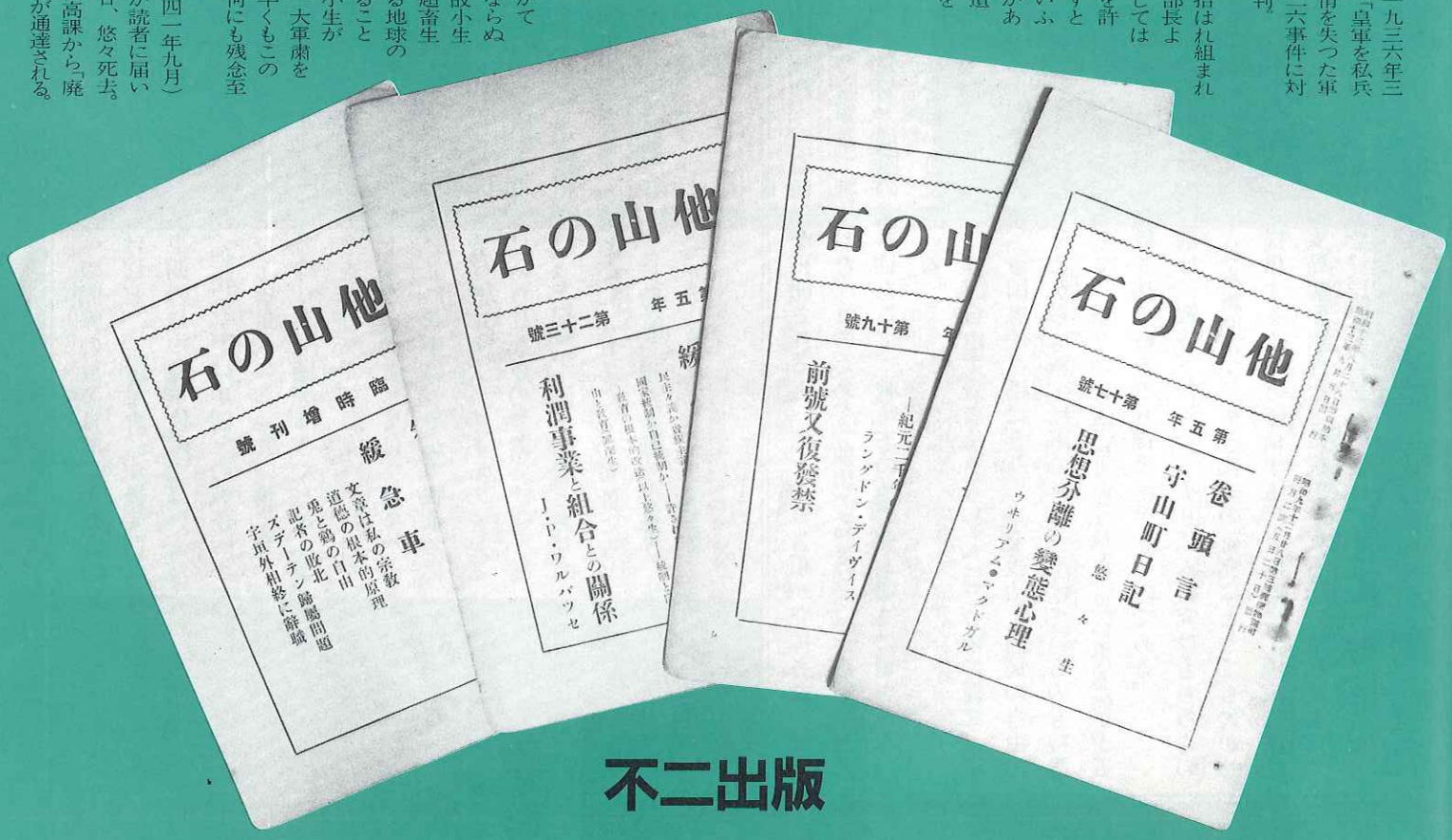
第七年第二号（一九四〇年一月）「緩急車」欄「毛沢東の揚言」より。

どうです、前号の本誌にはアンナに多く空白部分がありましただんだん暑くなりますので、これも涼しくていいでせうし、又『他山の石』らしいところもあつて、いいとあきらめて下さい。

第八年第一一号（一九四一年六月）「雑音騒音」欄より。検閲による削除部分が、誌面の多くを占めるようになったことについて。

時隅小生の痼疾咽喉カタル非常に悪化し流動物すら嚥下し能はざるやうに相成やがてこの世を去らねばならぬ危機に到達致居候故小生は寧ろ喜んでこの超俗生道に堕落しつゝある地球の表面より消え失せることと歓迎致居候も唯小生が理想したる戦後の一大軍粛を見ることなくして早くもこの世を去ることは如何にも残念至極に御座候

「廃刊の辞」（一九四一年九月）より。この文章が読者に届いた頃、九月一〇日、悠々死去。通夜の席に、県特高課から「廃刊の辞」発禁命令が通達される。



不二出版

推薦のことば〈順不同〉

戦時下における日本人の良心のあかし

家永 三郎

十五年戦争下の極度にきびしい言論統制の強行されているなかで、ギリギリの線で反戦反ファッショの言論を合法的に出版し続けたのが、矢内原忠雄の『通信』『嘉信』、正木ひろしの『近きより』と、それからここに復刻される『他山の石』という個人雑誌であった。個人雑誌という少数の読者に頒布されるものであったから、合法的刊行が続けられたのであろうが、大多数の国民が不義無謀の戦争への協力を余儀なくされていた状況のなかで、日本人の良心のあかしを後世にのこす金字塔といってよいであろう。

『嘉信』も『近きより』も一九四五年八月の降伏まで、官憲の廃刊強要を拒否して刊行を続けたが、『他山の石』は刊行者・桐生悠々が回復の見込みのない病にかかり、死の直前の一九四一年九月に自ら廃刊してしまった。それはちょうど米英への開戦の数ヵ月前に当たるので、十五年戦争後半期が欠けているけれど、『近きより』が後半期にますます筆の冴えを増しながら、前半期の日中戦争段階ではいまだ筆が十分に熟していないのに比べ、『他山の石』は中国との戦争への批判と国内のファッショ政治へのきびしい批判において、他に類のない徹底した主張を展開している。当時日本国民がほとんど知らなかった(知らされなかった)毛沢東の名をあげてその言葉への注目を求めているところなど、コミュニストでない人としては、驚くべき卓見といわねばなるまい。廃刊のあいさつ状中に、やがて戦争の終わったときに陸海軍の消滅する事態を予想する文言のあるのを見るとき、桐生の眼力に舌をまかないではいられないのである。

『他山の石』の所収論説の活字復刻はでているが、原本の形どおりの復刻版で戦時下の良心的言論人の心意気にふれることの可能となったのは、現在の情勢にかんがみ、まことに時宜を得た企画だと思う。

（いえなが・さぶろう　東京教育大学名誉教授）

桐生悠々

日本近代史研究に欠かせない貴重資料

太田 雅夫

『他山の石』は、戦時下抵抗のジャーナリスト桐生悠々の個人雑誌である。悠々は、一九三三年に「関東防空大演習を嗤ふ」という評論を発表して軍部の怒りを買い、『信濃毎日新聞』の主筆の地位を追われ、三十余年の新聞記者生活に別れをつげて、名古屋の土地で個人雑誌『他山の石』を舞台に軍部にたいする闘いを展開した。

『他山の石』は、一九三四年六月に『名古屋読書会第一回報告』を創刊してより、一九四一年九月五日付で校正刷のまま遺されている『他山の石』終刊まで、月二回発行し合計一七七冊の多きにおよんでいる。『他山の石』の編集内容は、海外の思想や知識を紹介する目的で、終刊までに百十数冊の外国書の内容紹介がなされている。また、ファシズムの進行とともに、論評欄「緩急車」、コラム欄「雑音騒音」が設けられ、言論活動が再開されると、悠々の真骨頂が発揮され時局批判や反軍論で埋まった。このため、『他山の石』は、二十数回にわたる発禁・削除の憂き目をみて、戦時下の他の個人雑誌に類をみない弾圧を強いられている。

また、『他山の石』は、自由主義者悠々らしく、五ヵ条の誓文、軍人勅論、教育勅語、帝国憲法を楯にとり、議会政治と国民の自由の擁護をくり返し、そこから反戦・反軍の叫びを挙げているのも特徴の一つである。さらに、悠々の自伝ともいうべき「思い出る儘」が五二回にわたって連載されているのも特筆すべきものである。

『他山の石』の復刻は、戦時下のジャーナリズム研究はもちろんのこと、明治文壇史・日本新聞史・日本近代史の研究にとっても欠かせない貴重な資料を提供するものと確信する。と同時に、国家機密法案や朝日新聞阪神支局襲撃事件などに代表される暗い時代再来への恐れが高まるなかで、『他山の石』の復刻は、まことに時機をえたものであり、その刊行を心から期待して止まない。

（おおた・まさお　桃山学院短期大学学長）

ジャーナリズム史にきざまれる記念碑（エピグラフ）

井出 孫六

桐生悠々といえば、まず思い起こされるのが、乃木大将の殉死について書かれた「陋習打破論」であり、つぎに思い起こされるのが、「関東防空大演習を嗤ふ」であり、最後に思い起こされるのが、日米戦争を最後まで反対しつづけるために出版しつづけられた個人雑誌『他山の石』のバックナンバーである。

一般に、新聞記者の書くものは「水の上に書く文字」のごとく、そのときがすぎれば忘れられていくものだが、右にあげた桐生悠々の文字は、この国のジャーナリズムの歴史にきざまれた記念碑（エピグラフ）として、永遠にしるしとどめられていくにちがいなく、ひとはこの記念碑（エピグラフ）を心にきざみつけることによって、どれだけ勇気づけられることか。

桐生悠々は、この国のジャーナリズムの歴史の中では、メイン・ストリートを歩いた人ではないけれども、ジャーナリストとして歩んだその生涯は、この国のジャーナリズムの歴史の中で屹立している。このような先人を過去にもったことが、後につづくジャーナリストにいかに多くの励ましをあたえることか。

桐生悠々に個人雑誌『他山の石』がなかったならば、あとにつづくジャーナリストに右のような勇気と励ましはあたえてはくれなかったにちがいない。晩年の渾身の力をふりしぼってつくりあげられていった個人雑誌『他山の石』が、いま不二出版から復刻されるときいて、わたしは大きな歓びをおぼえると同時に、この復刻版『他山の石』が広く深く若い人たちに読まれることを期待してやまない。

（いで・まごろく　作家）

ペン蘇生の血を求めて

むの たけじ

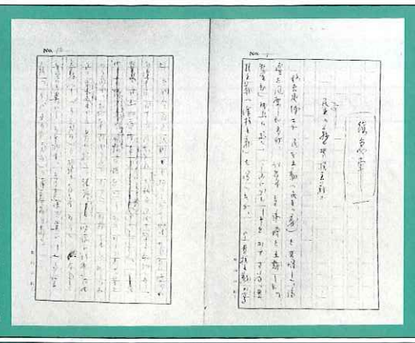
桐生悠々さんの足跡を振り返るとき、いつも自戒するのですが、この先輩を過去に向かって祭壇にまつり上げてはいけませんね。軍国の逆波に屈せず自分の志操を貫いた立派な人物、と追慕する姿勢にとどまるなら、歴史は骨とう品になってしまう。それじゃ、生きつつある人間たちの役に立たない。生きていく営みに直結しない。だからジャーナリズムが生まれたのではないか。生起する社会現象をジャーナル(日録)として記録し、印刷し、伝播し、広く吟味の対象とする作業は、歴史事実を将来に向かって正面教師または反面教師として活用したいためであり、その思いの底には「同じ過ちを同じような手順で繰り返すのでは、余りに愚かでみじめだ」という反省があったにちがいない。

悠々さんは、体の芯からジャーナリストだったと思いますね。逆境に敢えて孤立して個人誌を続けたのは、自分を持続させるのにそれ以外の道はなかったからでしょう。いつも胸に渦巻いていたものは日本社会の、民衆のきょう、あす、あさってのことで、だから日々のいろんな苦労に耐え得たのではないか。

こうした先輩たちの足跡を踏まえて、タテマエは見事な民主体制を組んで四十年を越えましたが、この列島社会は、またぞろ同じ過ちを反覆しつつありますね。その証拠に、ジャーナリズムという発音すら死に絶えたも同然ではないか。新聞に放送・出版・映画などを加えて「マスコミ」と自称するが、やっていることはトピックス(話題)の販売であり、軽薄短小の大量ゴミをまき散らしているだけではないか。全く無念ですな。

ジャーナリズムの、本来のペンを生き返らせる血を求めて、桐生悠々を学び直したい。彼の書いた一行一句が、どんな社会状況の下で、どんな思いをこめて刻みこまれたものであるかをかみしめれば、志をもつ者なら、きっと蘇生する血の騒ぎを自分の内側から感じとるだろう。

（むの・たけじ　新聞『たいまつ』主幹・社会評論家）



『他山の石』原稿

※内容見本（第五年第二三号・一九三八年一二月二〇日刊）原寸大

として、高配當を行ふ會社、特にこの戰時を利用して、益高配當を行ふ會社ありとすれば、國家總動員、國民精神總動員のイデオロギーから見て、果して許さるべきことであらうか。かくては舉國一致のスローガンは、利潤事業の廣告同樣、嘘八百のものとなりはすまいか。

經濟が政治を支配した時代は既に過ぎ去つた。過ぎ去つてゐなければ、將に過ぎ去らんとしつゝある。少くとも、戰時に於ては、政治が經濟を支配せねばならない。經濟を考へてゐて、どうして戰爭ができるか。看よ、我國は既に經濟を無視して戰爭してゐるではないか。經濟を無視しなければ、戰爭ができないからである。利潤などを考へる餘裕がないではないか。だが、これは戰時に限つたことではない。平和克服後に於ても、社會の趨勢は、社會化された國家は、經濟を統制するであらう。又統制しなければならない。經濟が政治を支配した時代は過ぎ去つて、政治が經濟を支配する時代が、正に到來しつゝある。この時代に於て、會社の配當を普通の金利なみに制限することに、何の遠慮が必要ぞ。

特に一君萬民なる我日本の傳統、我日本のイデオロギーの下には、各個人及び各團体に對して差別ある待遇を認めてはならない。一君の前には、私たちはすべて平等であらねばならない。犧牲を強いられるならば、萬民は平等にこれを強いられねばならない。

これを經濟の推移より見るも、生産が經濟を支配した時代は過ぎ去つて、今消費が經濟を支配する時代に入らんとしつゝある。利潤は生産の獨占すべきものではなくて、これを消費に返還しなければならない。今日の會社の利潤は漫に會社の株主に配當すべきものではなくて、その生産物を消費した消費者の手に返還しなければならない。此利潤を獨占する産業が、利潤なき故に衰微するのは、私たちの寧ろ歡迎すべき現象であつて、これ

なくとも、私たち消費者は何の痛痒を感ぜざるのみならず、これあるが爲に却つて社會的正義の觀念を傷け、結局何等かのカタクリズムを見なければやまないだらう。

教育の根本的改造

既述の如く、武漢及び廣東攻略を支那事變の一大段階として、内政の革新を要求する聲が到るところに囂しく叫ばれてゐるが、記者自身ではさうした餘裕はなく、政府は今後益戰勝の確保に全力を擧げて進むだらう、また進まねばならないことゝ思ふ。若も世人のいふが如く、内政革新の餘裕があるならば、彼等の唱道しつゝあるが如き、政治的、經濟的及び社會的な、寧ろ形式的な革新ではなくて、教育の根本的改造であらねばならないだらう。

彼等は如何なる制度も、人によつて運用さるゝことを知りながら、内政の改革に際して、國家の進歩、又は國家機關の運用もまた各個人、即ち一般國民の性質、資格乃至氣分と言つたやうなものによつて支配さるゝことを忘れてゐるらしい。制度を改革せんとするならば、先づこれを運用する人を改造しなければならない。特に彼等は壯なる大陸經營論、又は東亞改造論、乃至日滿支ブロックを標準とした對外的躍進論を唱へながら、この事に氣注かないのは、本末輕重を誤まるの嫌なしとしない。何ぜなら、彼等にして若もかゝる壯舉、かゝる偉業は唯政府の力、行政官の力のみを以てしては、遂行する能はず、それこそ舉國一致といふよりも、寧ろ國家を構成する全國民の力、即ち全個人の力を集めた總計的、全体的の力に待たなければならないことを知らねばならないからである。單純なる戰爭をなすにも、國民の精神力と物質力とに依らねばならないから、かゝる大事業を遂行するには、最終に於て、この力に依らねばならないことはいふまでもない。政府がその氣になれば、國民もまたその氣になるだらう位に心得てゐては、戰勝を確保することはできない。

一言にしていへば、彼等の觀念は政府又は官僚萬能論である。だが、政府又は官僚が國民を離れては何事をもなし得ないことは、この事變に際して、國民の擧げて認めたところであらう。否、彼等は官僚が却つて事變を誤り易き欠点あることを認めて、官僚独善論をすら唱へてゐるではないか政府や、官僚だけは大陸は經營されない。のみならず、今日の我国民を以てしては、大陸經營などは思ひも寄らぬ。かくするには、先ず我国民を根本的に改造しなければならない。

率直にいへば、揚子で重箱の隅をほじくるやうな島國根性では、大陸經營は寧ろ不可能である。形式のみを重んじて實質の如何を問はず、方法論に拘泥して目的論を忘れ、急ぐことを知つて廻はることを知らず、自己統制、自主道德の尊きを去つて、國家の統制、奴隷道德の卑しきに就き、しかして毫もこれを不快とせず、故山の快適にのみあこがれて、他鄕に於ける不羈的生活の經驗を嫌ひ、最終に、祖國ほど美にして完全なる國は世界に絶無なりと思惟する國民が、果して大陸を經營し得るや。私たちは、大に悲觀せずにはゐられない。

この悲觀を樂觀に一變せしむる條件は、我國民を根本的に再教育することである。島國的に無智なることは、イギリス人もまた日本人に劣らない。だが、彼等は大陸經營に於て、今日のこころ成功してゐる—たとひ將來は保障されないとしても—これがよい手本である。今日の我せゝこましい教育を以てしては、國民が擧げてこれに參加すべき大陸經營は不可能であるだらう。先づこれにイギリスと同樣、全体としてリベラルな教育を施さなければならない。自由主義の本質を知らず、唯經濟上に現はれた派生的の結果のみを見て、これを蛇蝎の如く嫌はねばならないことを教へられ、口

にはこれを唱ふるも、實はこれに執着して、斷乎として離婚を宣せず、裏面に於て、窃にこれと乳繰り合ふが如き國民では、少くとも植民地の經營すらも不可能である。況や大陸經營をや。

義務教育を八個年に延長するが如き形式的なる制度の改革ではない。中學卒業生を師範學校に收用して、これに教育學を授くるといふ如き形式的な制度の改革ではない。要は次代の國民をして今少しくリベラルならしむることである。そして既述の如く、これに今少しく想像力と冒險心とを養成せしむべきである。今日の如く、寧ろ極度に想像力も冒險心も抑壓し、安全第一主義を教へ込みつゝある我兒童教育を以てしては、大陸經營は困難である。

百年の計畫である。ソ聯に於ける五ヶ年計畫の成功を見て、これに模倣しつゝある各國の慌しい三ヶ年計畫、四ヶ年計畫、五ヶ年計畫を以てしては、東亞に於ける我勢力は確立しない。名實共に百年計畫である。こうするならば、先づ徐ろに國民教育を立て直すべきである。皇軍の敵たる蔣介石はたとひ今日はどうであつても、三百年後には、日支いづれが東亜の主人であるだらうかを想像してゐるといはれてゐる。さすがに大陸的な想像である。精々のところで、十年後を想像する我邦人の学び得るところではない。大陸に育ち、大陸的歴史の教訓を受けたるものゝ想像には私たちの寧ろ企及し能はざるところのものがある。彼の豪語連続連敗の經驗を嘗めながら、尚我に屈服せずして、彼が口にしつゝある引かれ者の小唄を、インフエリオリ・コムプレックスとのみ思ふなかれである。私たちは、この点に於て、彼に見習はねばならない。

統制と自由と教育（三）

罪深生

私は、近頃になつて漸く、大家の經濟學的な意見を少

※文中の枠囲みは、検閲で削除された箇所を、悠々直筆の原稿・校正刷によって新たに組み、補った部分である。原本が四六判のところ、製作上復刻版一頁に原本の四頁分を収録。

復刻にあたって

『他山の石』は、戦前期の反骨・不屈のジャーナリスト＝桐生悠々（政次・一八七三年～一九四一年）の主宰した個人雑誌である。一九三三年、「関東防空大演習を嗤ふ」という記事を発表して軍部の怒りを買い、『信濃毎日新聞』の主筆の地位を追われた悠々が、名古屋に移住し、発行した『名古屋読書会報告』と題するパンフレットが本誌の前身となった。

リベラルなジャーナリストである悠々にとって、二・二六事件や日中戦争の勃発などを背景に、あらゆる運動・言論活動が弾圧によって終息させられていたこの時期がどんなに苦難の時代であったかは、想像にかたくない。しかし、悠々は、大新聞という媒体を奪われてもなお、個人雑誌の形で、死の直前まで反軍・反戦の論陣をはりつづけた。

『他山の石』は、当初、その名のとおり、欧米の著作物を翻訳・紹介して国際状況の中での日本の立場を明らかにすることにつとめていた。しかし、悠々の現実への危機意識から、次第に憲法を盾として議会政治と国民の自由回復をくりかえし主張し、軍部による政治の危険を訴え、反戦を唱えるようになる。当然、当局からの弾圧も厳しくなり、誌上にはその跡が生々しい。本誌には、度重なる弾圧・検閲にも挫けることなく抵抗し続けた、ひとりのジャーナリストの良心が脈打っている。

小社では、戦時下における稀少な反体制雑誌である本誌を、前身誌『名古屋読書会報告』も含め、現在未発見の四冊を除き、全冊を復刻刊行する。復刻にあたっては、ご遺族の全面的な協力を仰ぎ、遺されている悠々直筆の原稿及び校正刷をもとに、四五〇箇所にわたる検閲による削除部分のうち二分の一弱を新たに組み、補った。

悠々が、「廃刊の辞」で呼んだところの「畜生道の地球」を去って四六年、彼の切望していた「一大軍縮」に未だ程遠い現在の状況を問い直すとき、本誌は貴重な手がかりとなろう。同時に戦時下ジャーナリズム研究・近代史研究に欠かせない重要資料として活用されることを望む。

関東防空大演習を報じる『信濃毎日新聞』

※『他山の石』・桐生悠々関連年表

（『名古屋読書会報告』『他山の石』を除き『』内はすべて新聞名）

一八七三年	金沢市に生まれる	
一九〇一年	『下野新聞』主筆となる	（30歳）
一九〇三年	『大阪毎日』学芸部入社	
一九〇七年	『大阪朝日』入社	
一九〇九年	『東京朝日』に社会批評欄「べらんめえ」を連載	
一九一〇年	『信濃毎日』主筆として長野へ赴任	
一九一一年	同紙に「べらんめえ」欄を設ける 大逆事件の判決を批判	
一九一二年	乃木将軍殉死のスクープ記事の号外発行 「陋習打破論」を掲載し、殉死を批判	
一九一四年	『新愛知』主筆として名古屋に赴任 同紙にコラム「緩急車」欄設ける	
一九一四年	『新愛知』退社、日刊紙『中京朝日』を刊行、翌年廃刊	
一九一八年	『信濃毎日』主筆として再び長野へ	
一九三二年	「五・一五事件」を批判。	
一九三三年	「関東防空大演習を嗤ふ」を発表し問題化 『信濃毎日』を退社、名古屋に転居	
一九三四年（昭和九）	名古屋読書会を組織し、個人雑誌『名古屋読書会報告』（半月刊）を刊行（第一年一～一四号） 一二月、『他山の石』と改題	（62歳）
一九三五年	同誌に「緩急車」欄を設け、時局批判を開始 第二年第五号初めて発禁	
一九三六年	「二・二六事件」を批判	
一九三七年	日中戦争開始に際し、「日支再戦せば」を掲載するが、検閲により大部分白紙	
一九三八年	度重なる発禁に対し、第五年二二号より校正刷の段階での事前検閲を求め、続刊	
一九三九年	検閲による白紙部分ふえる 自叙伝「思い出る儘」連載開始	
一九四一年（昭和一六）	一月、急性咽喉カタルで発熱、呼吸困難となる 七月、特高検閲課との対立により、事前検閲を打ち切る。たちまち翌号より発禁 九月五日「廃刊の辞」発送。一〇日喉頭ガンのため死去。同日「廃刊の辞」発禁 一二月、太平洋戦争始まる	（69歳）
一九四五年	敗戦	

※復刻版『他山の石』概要

※内容　一九三四（昭和九）年六月～一九四一（昭和一六）年九月
全四巻（一七三冊＋「廃刊の辞」・別冊一

※体裁　A4判　上製　総一、四九〇ページ
（原本は四六判ですが、製作の都合上、復刻版一頁に原本の四頁分を収録しました）

※別冊　解説（荒瀬豊　東京大学新聞研究所教授）・総目次・索引

※揃価　六〇、〇〇〇円（別冊のみ分売可・定価一、〇〇〇円）

※刊行　一九八七年九月刊行済

※推薦　家永三郎　井出孫六　太田雅夫　むのたけじ（五十音順）

※新刊のご案内

評伝　桐生悠々
——戦時下抵抗のジャーナリスト

太田雅夫　著

B6判　並製　二五〇ページ
定価　一、五〇〇円

桐生悠々（政次）は、一八七三（明治六）年金沢市生まれのジャーナリスト。『新愛知』『大阪朝日』『信濃毎日新聞』などを舞台に、常に「社会の木鐸」たらんと、民衆の側にたって言論活動を繰り広げた。ジャーナリズムが権威にこびることを嫌い、その主張のために数々の弾圧を受けることをも辞さず、新聞記者が「無冠の帝王」であることを体現したような人であった。悠々の真骨頂である個人誌『他山の石』は、激しい言論弾圧のもと、死の直前まで軍部主導の政治を批判しつづけた、反戦・反軍部の主張の砦であった。

本書は、不屈の一ジャーナリストの生涯を克明かつ明快に綴った評伝である。紀伊国屋新書版『桐生悠々』を増補・改訂し、決定版として刊行する。

※関連図書〈復刻版〉のご案内

日本学芸新聞　戦争に対する戦争　文学時標

本紙は、一九三五年創刊。文芸批評紙であると同時に文字通り文壇の「通信」であった。言論統制下にあって、文学・芸術の自由を訴えた数少ないジャーナリズムであったが、一九四二年に発足した日本文学報国会の機関紙としての役割を果たすこととなり、やがてそれは『文学報国』へと受け継がれてゆく。全一五五号の完全復刻。

全三巻（昭和10年11月～18年7月）別冊一・付録一
別冊＝解説（香内信子・香内三郎）・総目次・索引
付録＝文芸思想講演集（昭和12年10月刊）
B4判　上製　総一、一〇四ページ
揃定価　六五、〇〇〇円

日本左翼文芸家総連合編の「反帝国主義戦争創作集」。日本最初・戦前唯一の反戦アンソロジー。小川未明・金子洋文・黒島伝治・壺井繁治・武田麟太郎ら社会民主主義・無政府主義・共産主義・自由主義の作家たちが、セクトを超えて集い、迫りくる戦争の姿を予感して描いた小説・戯曲・童話・シナリオ・詩など二〇編を収録する。

一九二八（昭和三）年刊
日本左翼文芸家総連合編
解説＝西田勝
四六判　並製　総四二六ページ
定価　二、八〇〇円

第二次世界大戦敗戦直後に発刊された文学新聞。編集＝荒正人・小田切秀雄・佐々木基一。戦争中における文学者の責任を問い文学の全的解放を謳った本誌は僅か一三号という短命に終わったものの、戦後の民主主義文学運動の先駆的役割を担った。全一三冊を一巻にまとめ、回想・解説・総目次・索引を付して、復刻刊行。

一九四六（昭和二一）年一月～一一月刊
回想＝小田切秀雄・佐々木基一・小田切進
解説＝伊藤成彦
B5判　上製　総八〇ページ
定価　二、〇〇〇円

本カタログ中の表示価格は、全て消費税を含んでおりません。

不二出版
東京都文京区向丘一―二―一二
TEL　〇三（八一二）四三三
FAX　〇三（八一二）四四六四
振　替　〈東京〉六―九四〇八四